

平和首長会議代表スピーチ（田上長崎市長）

議長、各国政府代表の皆様、市民グループのリーダーの皆様、私は、長崎市長の田上富久です。本日は、核兵器禁止条約の出発点となる記念すべき会合において、お話しする機会をいただき、深く感謝いたします。

被爆者は、核兵器禁止条約こそ「核兵器のない世界」へと照らす希望の光であると称え、その誕生を大いに喜びました。私は2017年8月9日の長崎原爆死没者慰霊平和祈念式典において、平和宣言の中で、被爆者の苦しみや努力にも言及したこの条約を「ヒロシマ・ナガサキ条約」と呼びたいと申し上げました。

ここで改めて、条約成立にご尽力されたすべての皆様の、世界から核兵器をなくそうとする強い意志と勇気ある行動に、敬意と感謝を表します。

条約が発効して約1年半が経過しますが、ウクライナ危機の中、「核兵器による威嚇」を経験し、「核兵器使用」の危機にさらされている今だからこそ、この条約の意義が非常に大きくなっていると感じています。なぜなら、私たちが直面している“今ここにある危機”を明確に禁止する国際条約は、核兵器禁止条約だけだからです。

危機を実感している今、核兵器使用や核兵器による威嚇を防ぐことは、条約に賛成していない国も共有できる行動原則です。これを普遍化していくことで、核兵器を使わせないまま、私たちの最終目標である核兵器廃絶へと導いていくことができるのではないのでしょうか。

現在、核兵器のない世界への道は険しさを増していますが、このように混沌とし、道を見失ってしまいそうな時こそ、「今と未来に生きる人間を守りたい」と強く願い、心の奥底に閉じ込めておきたい記憶をこじ開け語り続けた、被爆者の声を思い起こし、勇気にかえてください。条約の原点である被爆者の体験を私たちが共有することはできませんが、被爆者の思いは共有することができるのです。そして、第三の戦争被爆地を生み出す危機が高まっている今こそ、被爆者が訴えてきた「長崎を最後の被爆地に」を合言葉に、力を合わせ、「核兵器を絶対に使わせない」という共感の連鎖を世界中に広げていきましょう。

この会議で大きな一歩を踏みだされること、そして核兵器廃絶に向けた機運醸成の契機となることを大いに期待し、私のスピーチを終わります。ご清聴ありがとうございました。